

フェアプレイ
インタビュー
【競泳男子】
鈴木大地
スポーツ庁長官



プロフィール
生年月日：1967年3月10日
出身地：千葉県
1988年
ソウルオリンピック
100メートル背泳ぎ
金メダリスト

「フェアプレイ7カ条」は 人生の7カ条



予想くつがえす決勝のレース

みなさんが生まれるずっと前の1988年。韓国のソウルで開催されたオリンピックの水泳男子100メートル背泳ぎで、当時21歳の鈴木大地選手は金メダルに輝きました。予選では、トップの選手に1秒以上も遅れる3位でしたが、決勝では得意のバサロ泳法（バタフライのドルフィンキックを裏返しにした形で水中を潜ったま

ま進む泳ぎ方）を最大限に使って55秒05の自己ベストをマーク。予選でのタイム差を考えると金メダルは難しいとの周囲の予想を見事にくつがえし、日本水泳界に16年ぶりの金メダルをもたらしました。オリンピック前は腰痛で苦しみ、思うような練習をできない時期もありました。「苦しいと思った時もあったが、続けてよかった。好きでやっていただけだし、外国人との交流が楽しみで、真の友情を得るためにやっていた」と笑顔で当時を振り返りました。

スポーツ庁の初代長官に

競技をやめた後は大学の教授になり、日本水泳連盟の会長にも就き、2015年に創設されたスポーツ庁の初代長官となりました。スポーツ庁は、オリンピック選手の手活動を支えたり、国民の健康づくりにかかわったりする国の組織です。そのトップとして4年間にわたりスポーツ庁行政に取り組んでいます。

「勝っても負けてもスポーツから学べる」

鈴木長官は、JSPOが定める

「フェアプレイ7カ条」を見て「これは人生の7カ条でもありますね」と感心したように話しました。7カ条は「約束を守る、感謝しよう、全力をつくそう、挑戦しよう、仲間を信じよう、思いやりを持とう、たのしもう」。鈴木長官は「まず楽しんで。楽しくないとつまらない。楽しんで、それから感謝し、挑戦すればいい」と自身の体験からそう強調しました。「スポーツをやることは人生の疑似体験。人生で勝ち続ける人は1人もいない。勝っても負けてもそこから学べる。勝ってもおごらず、負けてもくさらず、次回に向かって動き出すことが大事。続けることに価値があります」と気持ちを込めてアドバイスしました。



フェアプレイストーリー フェアプレイニュース フェアプレイヤーの伝道者「ウェルフェアオフィサー」

サッカー

自分のチームがミスをした時、相手チームが点を入れた時、審判の判断に納得がいかなかった時など

試合中は勝ち負けにこだわらないうちに、なにやってみよう

しかしスポーツの大前提は「楽しむこと」

選手や応援団、コーチや監督は、どう振る舞うのが良いだろう？

サッカーの現場では同じサッカー仲間として

ちょっと熱くなっているね

次からはこうするといいかな

なるほど

ウェルフェアとは「安心」や「福祉」を意味する英語で

今日の応援は素晴らしい！

「フェアプレイヤーかどうか」の視点からアドバイスをするウェルフェアオフィサーがいる

この意見交換が試合中の自分の言動を見つめ直すきっかけになる

あ、取れたけどみんな頑張った

おお!!

「ファイブ」

「ファイブ」

相手のプレーもよかったな

この指示の出し方がよかったです

練習でも使ってみるか!

子どもたちが安心・安全にサッカーを楽しめる環境づくりを推進する役割として、日本サッカー協会が配置している

今ではクラブやチームにもウェルフェアオフィサーが置かれることもあり、

いい挨拶だね!

もっとチームワークを高めるために肩を組んでみよう!

このように、日本サッカー協会などスポーツ団体は

みんながリスベクトし合い、スポーツを楽しむ環境を整えるため、これからも活動していく

彼らは普段のチームの雰囲気より良くなるために活躍している